

講演Ⅱ「当院における多職種で取り組む がん患者の栄養管理」

講師 近畿大学病院
栄養部 科長代理 渡辺 紗耶佳氏

〈病院食での食思不振者への対応〉

「パール食（主食選択制、少量）」「スナック食（お好み焼きなど味が濃いもの）」「個別相談食」がある。

〈がん通院治療センターでの業務〉

がん専門管理栄養士が常駐。医師の診察後、点滴時間などを利用し多職種から指導を実施。栄養指導対象者は初回患者、レジメン変更者、食事摂取不良者・体重減少が顕著な患者などが中心である。

食思不振者には症状に応じて指導する。例えば「吐き気・嘔吐」では水分とミネラルをこまめに補給し、冷たくて口当たりがよいものの提案、「少量で栄養を確保したいとき」はケーキやプリンなどのスイーツ類や少量高栄養の補助食品の提案などが行われる。

〈がん患者への栄養サポート例〉

膵管内乳頭粘液腫で糖尿病を合併する患者へは、外来から入院術前後など各ポイントにおいて多職種で情報共有しながら継続指導を行った。また10代の膵神経分泌腫瘍患者へは、膵全摘後のカーボカウント指導や、TPN管理下でも「食べたい思い」に寄り添い病状に合わせ茶碗蒸しやスープなどを提供した。

〈がん化学療法入院患者の摂取量調査〉

高炎症群と低炎症群で摂取量の差は認められないが、初回クール群に比べ最終クール群の体重・摂取栄養量は減少した。抗がん剤治療の継続に伴い栄養不良リスクが上がることが示唆され、継続的な栄養管理が重要と考えられた。

（文責 医療 川勝知佳）